

あした天気になあれ

菊地 正／作 藤沢友一／画



あした天気になあれ

菊地 正・作
~~藤~~沢 友一・画

あした天気になあれ

創作児童文学

第1版第1刷／1973年11月©

第5刷／1978年9月発行

著者／菊地 正

発行所／株式会社 金の星社

〒111 東京都台東区小島1丁目4-3
電話／東京03-861-1861（代表）
振替／東京0-64678

印刷／（有）協栄印刷
製本／協和製本（株）

乱丁落丁本は、ご面倒ですが小社営業部宛て送付
下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

913 菊地 正

あした天気になあれ

金の星社 1978

189 P 22cm (創作児童文学)

基本カード記載例

8393-012201-1406

はじめに／作者

ちいさこちゃんは、夕やけの美しい山の村の子どもです。

夕やけの中で、“あした天気になあれ”と大きな声で、サンダルをけりあげました。

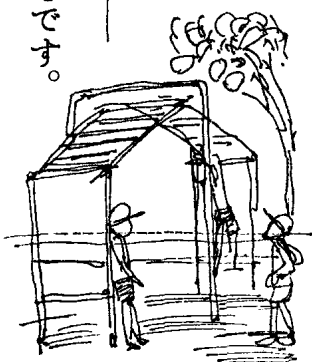
あした天気になれば、町へ働きに行っている、かあちゃんが帰ってきてくれるのです。

あした天気になれば、たくさん、すばらしいことが生まれます。

みなさんも、ちいさこちゃんといっしょに、

“あした天気になあれ”

と、大きな声でいってください。



■もくじ……………あした天気になあれ

はじめに 1

木曾の山つ子 6

夕やけとんぼ 赤とんぼ 19

泣き虫の神さま 35

としよりと子どもの村 52

山の神の衣がえ 62

死にそこないの神さま 78

いのちの火が消える 88

たましいは屋根の上 98





あとがき・ふるさとの心

188

きつねの嫁入り

169

峠のむこうの遠い町

155

さびしい秋祭り

141

出雲の神さま

125

ごせがえりの朝

109



作者・画家の紹介

菊地 正 (きくち ただし)

1927年、東京に生まれる。同人誌「作家群」「子どもの町」等を経て創作活動を続け、「母と子の川」で第5回日本児童文学者協会新人賞。主著に「野火の夜あけ」「きょうもともだち」「つばき屋敷のひみつ」などがある。

現住所・東京都八王子市大和田町13-15

藤沢友一 (ふじさわ ともいち)

北海道小樽市に生まれる。東京芸術大学卒。自由美術家協会会員を経て、現在アートクラブ会員。絵本「はしれグlaus」ほか、主な装幀・挿画作品に「野火の夜あけ」「むくげとモーゼル」などがある。

現住所・東京都目黒区中目黒1-1 フラワーマンション307号



あした天気になあれ

菊地 正

創作児童文学



木曾の山っ子

坂道をかけのぼってきた、ちいさこちゃんは、石地藏の曲がりかどで、山がえりの彦さんと、いふうとつするところでした。

「おっととととと……。」

彦さんは、大げさからだをひらいてよけました。背負った大たばこのソダの重さを利用して、くりとひと回りしました。そうしたほうが、倒れないですむからでした。

「ちいさこちゃんよお。あんで、そんなに、いそがしいんかよお。」
かけていくちいさこちゃんのうしろから、声をかけました。

「じいちゃん、帰ってくるずらよ。」

ちいさこちゃんは、ふりむきもしないで、そのままかけていきました。そして、小さなからだをは

ずませて、村の集会所のある石だんを、かけのぼっていきました。

ちいさこちゃん、木曾の山つ子でした。中央アルプスと呼ばれる木曾山脈の南のはずれ、長野県下伊那の、しずかな谷間の村の子どもでした。ほんとうの名まえは、千沙子といました。もうすぐ秋がおわると満で五歳になるのです。黒い長い髪が肩までのびて、つやつやしています。ぼっちりで、ちょっと上をむいた鼻と、ぶどうのようなひとみを、きらきらさせた女の子でした。

千沙子ちゃんは、もっとちいさいころ、かわいいくちびるをなめながら、自分の名まえを「ちさこ」と呼べずに「ちいさこちゃん」といました。それで、千沙子のかあちゃんも、じいちゃんも、村の人たちも、みんな「ちいさこちゃん」と呼びました。千沙子ちゃんと呼ぶよりも、ちいさこちゃんと呼んだほうが、ほんとうにびったりしていたからです。

村の集会所の石だんは、このあたりでは、ちょっと、につかないほどの、りっぱなミカゲ石でした。ひろい石だんは、小さな女の子のちいさこちゃんには、ひと足ずつではのびれません。ふた足ふんでから、ひと足びよんとのびりました。

三十だんめのおわりのところで、ちょっとつまずいて、ころびそうになりました。でもがんばって、そのままかけていって、集会所の横の松の木のところにつきました。

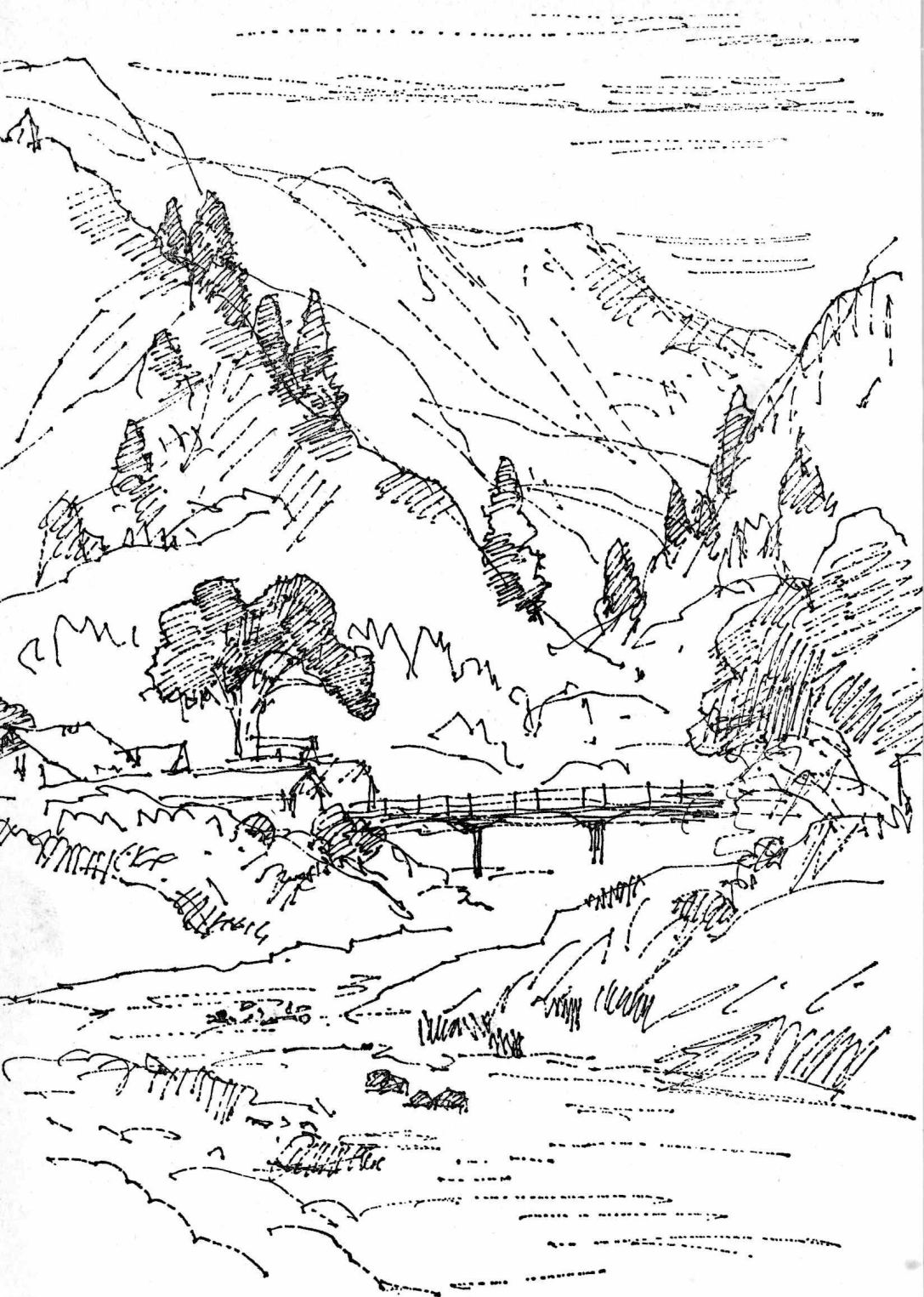
ここから見える村のけしきは「村一番」だといわれていました。町までつづく、くねくねした街道

が、峠とうげのふもとを曲まがるまで見通せました。道にそって、こちらがわには三十戸さんじゅうほどの家がならび、むこうがわには谷川が流れていました。むかし、てんぐが住すんでいたというてんぐ山や、そのむこうに遠く、木曾山脈きそんみやくの南でいちばん高い恵那えなの山も見えました。

たしかによい見晴らしですが、「村一番」というのは、すこし大げさでした。いなり神社じんじやの石だんは百だん近くもあって、木曾きその山ばかりでなく、はるかに赤石あかいしの山々まで見わたせました。てんぐ山の中腹なかぶくにある善宝寺ぜんぼうじの山門さんもんのところからの眺めながめもすてきでした。けれども二年ほどまえに、ここに、りっぱな集会所しゅうかいじよが建てられました。村じゅう総出そうでの力の寄せ合よいで作られたものでした。「公民館こうみんかん」というのがほんとうで、玄関げんかんにもそう書いてあるのですが、まだ呼びなれないものですから、いままでのように集会所と言っていました。

村の人たちは、この集会所がじまんでした。村役場むらやくばや組合くみあの事務所じむしょや学校より、りっぱな建物たてものでした。建材けんざいは、村の共同山きょうどうやまのひのき材ざいです。ひのきは木曾きその山の村ではじまんの建材けんざいでした。土台どだいも、谷川からあつめた形のいい玉石いしを敷しいてたたきました。石だんもミカゲ石ミカゲいしです。ですから集会所からのけしきが「村一番」になったのです。

「村一番」でも「村二番」でも、ちいさこちゃんには、どちらでもいいのです。ちいさこちゃんは、ここが一番すきでした。



町へつづく街道が、一番よく見通せるからでした。

ちいさこちゃんは、松の根っこが地面にもり上がっているところに乗っかって、峠のふもとの、道のはしをにらんでいました。ちいさこちゃんの胸が、ときんときんと鳴っています。いままで、いっしょうけんめいかけてきたからですが、もうひとつのわけは、峠の道にバスが見えるのを、待ちきれないほど待っているためでした。

集会所の中では、おおぜい、おとなの話し声がしていました。村の寄り合いがあるのでしょう。

ちいさこちゃんは、もうひとつ高い根っこにのぼりました。やがて、峠のむこうに白いほこりが上がれば、町からバスがくるのです。ちいさこちゃんは、バスの色もよく知っていました。水色のボデーに黄色の帯をしたバスです。クラクションだって、山の材木組合のトラックの音と聞きわけられませんでした。

「おおや、ちいさこちゃん、もうおむかえかい。」

うしろから声をかけた人がいます。ふり返ったら善宝寺の一角さんでした。一角さんは「てるてる坊さん」というあだ名のある、おじいさんの和尚さんでした。善宝寺の若い和尚さんは、一慶さんといって、まだ大学を出たばかりなので、髪の毛がふさふさしていました。となり村の中学校の先生もして、オートバイに乗って通っていました。一慶さんは、ちっとも坊さんらしくないのですが、

一角さんは、その分だけ、ほんとうに「てるてる坊さん」でした。つるつる、びかびか、つるりんと、みごとにばげていました。

一角さんは、集会所の廊下のはしの、下からおへそを押すと水の出る手洗い器で、手を洗っているところでした。衣をひじでまくりあげると、下からハンカチをひき出して手をふきながら、「両腕をのばして腕時計をのぞきました。

「ちいさこちゃんや、まだ、はやいぞ。三十分もはやいぞ。」

「いい。」

「風がつめたいで、かぜひくなや。」

「うん。」

ちいさこちゃんは、くると向きなおりました。ちょうどそのとき、山のかげに砂ぼこりが見えました。

「きたノ」

ちいさこちゃんは叫びました。

ちいさこちゃんには、よくわかりました。バスのはこりは、ゆっくり高く上がります。トラックのは、ひくく広くひろがるのです。

「バス、きたぞ。」

そういうと、ちいさこちゃんは、また、うさぎのようにかけ出しました。石だんを、赤いサンダルが、バネのようにはずんでおりていきました。

「ころぶなや。」

一角さんが、大声でいいました。

ちいさこちゃんが、石だんにかくれて見えなくなってから、一角さんは、廊下でのびあがって見ました。

「ほんとに、バスかいのう……。」

廊下からはよく見えませんでした。一角さんは庭下駄をつっかけると、ちいさこちゃんがいた松の木のところまで出てみました。

「おんや、こりゃたまげた。」

たしかに町からくるバスが、村の一本道をこちらにむかって走っていました。

一角さんは、腕をのばして時計を見ました。

「こりゃいかん、とまっとるわい。」

ほんと腕の時計をたたきました。正確には一時間半ちがっていました。時計を耳にあてながら、下

をのぞきました。ちいさこちゃんが、石地藏いしじぞうの曲まがりかどをかけていくところでした。ちいさこちゃん、バスの停留所ていりゅうじょまでいくのです。

「すまん、ちいさこちゃんや、時計が役やくをせんでのう。」

ひとりごとで、一角さんはそういいました。

*

それから三十分ほどして、寄り合いの相談さうだんがおわりました。一角さんは、村の役員やくいんたちよりひと足さきに集会所を出しました。

石だんの途中とちゅうで、腕うでをつき出すようにして、また時計を見ました。こんどは、とまっていますませんでした。

さっきは、ちいさこちゃんにわるいことをしてしまったと、一角さんは思いました。そして、ちいさこちゃんが、いまごろは、なにをしているかな、と思いました。谷川のむこうの家で、じいちゃんと町の話でもしているだろうと考えました。

ちいさこちゃんは、じいちゃんとふたりぐらしでした。

ちいさこちゃんが赤んぼうのとき、とうちゃんは山の仲間なかまといっしょに、東京へ出かせぎにいった

のです。山では、きり出す材木がへって、とうちゃんたちのしごとが、すくなくなっていました。

とうちゃんたちのほかに、出かせぎにいく村の男衆はたくさんいました。出かせぎは、山しごとのほか、山の田んぼや畑のしごとがすむ秋から冬のあいだで、春のはじめには村に帰ってくるのですが、なかには、三年も四年も、かせぎに出たままの人もいました。遠くだったら東京とか横浜のほうまで出かけました。近くでしたら、名古屋や静岡や豊橋あたりの、にぎやかな町へいってしごとをしにくるのです。

ちいさこちゃんとうちゃんは、東京の郊外の八王子という町で、道路工事のしごとをしていました。山の村にいるより、たくさんお金がもらえるしごとだったので、出かせぎに出て三年めでした。あたらしい道路が、電車の線路と立体交差する、陸橋をかける工事場で働いていたのです。

とうちゃんは山のしごとだったら、だれにも負けない山男でした。まちがっても、木から落ちるようなことはありませんでした。そのとうちゃんが、工事場のやぐらの上から落ちたのです。

「ましら（猿）のような男でも、魔がさすことがある。」

「ひどく、つかれとったずら。」

と、村の人が話していました。

そのとき、背中を打ったのが悪くて、それで重い病気になるって死んでしまいました。八王子の病院